

医療法人天馬会

## チクバ外科・胃腸科・肛門科病院



チクバ外科・胃腸科・肛門科病院は、児島と水島に近接する、四方を山に囲まれた自然豊かな環境にあり、県内はもとより、四国や山陰、近畿圏からの患者を受け入れている。昭和47年に19床の有床診療所として開院。その後増改築をくり返し、平成21年5月に新築移転、さらに平成30年11月に新棟が増築され現在に至る。「大腸肛門領域の疾患を中心とした消化器専門病院として地域の医療に貢献いたします」という理念のもとに診療を行っている。診療内容は①肛門疾患、②大腸内視鏡、③炎症性腸疾患の3つの領域を大きな柱としており、全国的にも数少ない肛門疾患を専門する病院の1つ。

肛門疾患領域では、年間約6,700人の新規痔疾患患者が受診、肛門手術は約1,100件実施。最近では、肛門の排便機能を評価・改善することにも力を入れ、特殊な超音波検査や造影検査の機器を導入し、便秘や便失禁をより科学的に治療する体制も構築し、最先端の治療を行っている。

消化管内視鏡検査は年間約14,000件実施しており、特に大腸内視鏡検査約8,000件は、小規模病院ながら岡山県でもトップクラスの実績。日本消化器内視鏡学会指導認定施設でもある。

炎症性腸疾患の領域では、平成30年11月に炎症性腸疾患（IBD）センターを新たに設置。現在約500人の診療を行っている。IBDチームも積極的に活動しており、多職種連携によって患者サポートを実施している。

## 「大腸肛門領域の専門病院として地域の医療に貢献する」



薬剤部には、薬剤師5名、調剤アシスタント1名の計6名が在籍。薬剤管理指導や病棟薬剤業務、チーム医療への参画、薬学生の実務実習指導に注力している。病棟薬剤業務には特に力をいれており、2012年当初から算定している。チーム医療では、医療安全や感染対策、がん化学療法、NSTなどほぼすべての医療チームに薬剤師が参加し、問題の解決や新しい活動の構築などに貢献している。特にNSTや褥瘡対策チームでは、カンファレンスの参加、回診への同行を通じて薬剤師力を十分に発揮している。また実務実習では薬剤部内の実習にとどまらず、服薬指導の実践やチーム医療体験の機会を多く受け、さらに肛門手術、内視鏡など実際の治療の見学も行っている。日頃の服薬指導や疑義照会の中で、多くの薬学的介入事例や副作用事例に遭遇することから、活動を明確に記録として残すことが重要と考え、ブレアポイド報告を積極的にを行っている。RMPやポリファーマシー対策も業務の中に取り入れ、患者さんがより安全に服薬で

きるよう努めている。

「働き方改革」も積極的に進めており、月に2日はNo残業dayとしている。No残業dayの導入によって、残業時間は減り、業務にもメリハリが生まれたとのこと。定時で帰り自宅でのんびり過ごすもよし、趣味や習い事をエンジョイするもよし、勉強会に参加して知識の向上を図るもよし、職員にも高評価だという。また、別の取組みとして、パワーチャージ休暇を導入している。薬剤師数が限られていることから、長期休暇が取りづらい雰囲気があったが、パワーチャージ休暇と称した、年1回の5日間連続した休暇を取得する制度を設けることで、雰囲気を一新した。これによって、職員も旅行に行くなど、リフレッシュ＝パワーチャージができるようになり、職場が活性化したとのこと。新型コロナウイルス禍のなか、海外旅行はもちろん国内旅行も敬遠しがちな昨今ではあるが、今後も職場の活性化には不可欠な制度であり、継続していく予定。



薬剤課長

**原野 晴美**先生  
Harumi HARANO

PROFILE

- ▶薬剤師歴29年
- ▶児島郡灘崎町出身（現在は合併して岡山市）
- ▶広島大学卒
- ▶趣味：女声コーラスでメゾソプラノを歌っています。コーラスの腹式呼吸は健康に良いですし、病院関係以外の人と交流することはとても良い気分転換になります。



薬剤課長

**笠原 典子**先生  
Noriko KASAHARA

PROFILE

- ▶薬剤師歴29年
- ▶大阪府出身
- ▶福山大学卒
- ▶社外活動：チクバ外科バレーボールチームマネージャー
- ▶夢：アプリのプログラミングやイラストレーター

## 学びを共有、発信することで、皆が成長できる職場にしたい

### ●組織運営で大切にしていることについて教えてください

私は若い頃から多くの先輩に恵まれ、医薬品の基礎知識、医薬品情報の取り扱いなど、幅広く多くのことを教わり学ぶことができました。そのことが今の病院薬剤師としての自分を支えていると思っています。そしてこの学びを自分の中だけにとどめず、多くの薬剤師が活用できる形にし、標準化することも大切だと考えています。例えばがん化学療法のレジメンごとに「確認すべき検査値チェックリスト」を作成しました。これを活用することで、若手薬剤師も経験豊かな薬剤師と同様のレベルで化学療法実施の可否を判断でき、支持療法の提案を行えるようになりました。この経験が若手薬剤師の成長のきっかけとなり、ひいては薬剤部全体のレベルアップにもつながると思っています。

私は普段から「〇〇すれば〇〇できる」というpositive wordを使って、スタッフが少しでも前向きに業務に取り組めるよう心がけています。同時にgood jobと感じた時にはすかさずほめ言葉をかけるようにしています。ほめる時はなるべく大勢の前でほめることが次のgood jobを生む秘訣です♡

### ●医薬品安全管理責任者としての仕事について教えてください

院内スタッフへの教育活動の1つとして、医薬品安全研修会

を毎年開催しています。今年は初の試みとして「医薬品関連インシデントに対する各部署の取り組みの発表」を企画しました。看護部や薬剤部を中心に5部署が発表を行い、最も優れた取り組みを行った部署に「院長賞」を贈りました。今回の発表を通じて、チクバ外科の多くのスタッフが日頃から医薬品安全に熱心に向き合い、様々な工夫をこらして取り組んでいることを実感しました。今後もスタッフの医薬品安全に向けた一歩を支え、病院全体として安全な医療が実現できるよう努力していきたいと思っています。

### ●今後の展望についてお願いします

一人の薬剤師としてまず、患者さんの話をよく聞き、心配や問題を解決できるスキルを身につけ、小規模でアットホームな当院の環境を十分に生かして、患者さんの薬物治療に身近に寄り添う存在でありたいと思います。臨床の中で得た経験や情報を、様々なエビデンスを構築するsourceの1つとして、例えばプレアボイド報告や医薬品安全性情報報告、学会発表、論文など適切なかたちでout putすることが病院薬剤師に期待されるニーズと考え、これに応えていきたいと思っています。チクバ外科は小さい病院ですが、小さい病院だからこそできる、先進的な取り組みを積極的に行っていきたいと考えています。

## 常に新しいことに挑戦するワクワク感を大切に

### ●中心的に行っている活動について教えてください

最近、特に力を入れている業務の一つは医薬品リスク管理計画（以下、RMP）です。初めてRMPという言葉聞いた5年前は、自分が取り組む仕事だと思っていませんでしたが、RMPを読み解くうちに、どうやら「リスク最小化活動」を担うのは薬剤師のようだとなりました。「リスク最小化活動」とは薬を服用する患者さん自身が薬の副作用を知り、その初期症状に対処できるよう支援する薬剤師の活動です。具体的には製薬会社が作成する「適正使用の資材の配布」や「患者向医薬品ガイド」、投薬時に作成する「薬剤情報提供書」等を活用して患者さんが何に注意すれば良いかわかるようにすることです。

当院では胃内視鏡検査を多く行っていることから、関連薬剤の中で副作用が高頻度に発現する薬剤に対して、投薬時にリーフレットを用いて起こりうる副作用と対処方法を必ず伝えるようにしています。本来であればすべての薬剤でこのような説明が出来れば良いのですが、なかなか出来ないのが現状です。そこでRMPを活用することで、より効率的に重点薬剤を絞ることができ、指導の内容を見直す良い機会だと感じました。

### ●病院でのスポーツ活動を通して

チクバ外科のバレーボールチームに所属しています。チームには看護師、検査技師、栄養士、調理師、事務職員など多職種が加わり、仕事以外で盛り上げられる関係性ができ、仕事上のコミュニケーションも良好です。持参薬確認などの新しい業務を構築する際は必ず他部署を巻き込むこととなりますが、スポーツなどで親しくなっていることで、協力的なサポートを得られました。また、薬剤部もスポーツ同様のチームプレイなので、スタッフの能力を理解し、適材適所で活かすことをいつも考えています。経験を積み上げていくと、短時間で多くの仕事をこなすことができるようになりますが、年齢も積み上がっていくのでパワフルさや記憶力の衰えは否めません。それでもここ一番という時、バレーボールでは「1球、1球を丁寧に」、仕事では「1枚、1枚の処方箋を丁寧に」さあ今日もがんばるぞと自分に魔法をかけます。

### ●今後の展望について教えてください

児島地区の医療機関や保険薬局と、外来化学療法の連携などを進めています。立場や視点を越えたよりシームレスな薬物治療ができる環境を整えていきたいです。



画：笠原先生



## PROFILE

- ▶ 薬剤師歴33年目
- ▶ 岡山県玉野市出身
- ▶ 昭和薬科大学卒
- ▶ 趣味：只今、落花生の栽培に初挑戦中！
- ▶ 行きつけのケーキ屋ランキング
- 1位：ル・リュバン（八浜駅近く）
- 2位：ミルクパーラー（宇野駅近く）
- 3位：うちカフェ（常山駅近くのローソン）

## | 実習生の成長ぶりを見るのがうれしい

## ● 特に力を入れている取り組みは？

NSTの一員として活動を開始してからは3年目になりますが、毎週行われるカンファレンスや回診に参加し入院患者さんの栄養サポートを行っています。プラン通りに栄養状態が改善することは決して多いわけでもなく、悪戦苦闘の日々です。採血結果や担当の薬剤師から情報を収集し低栄養の患者さんを抽出していきますが、当院では炎症性腸疾患の患者さんを多数受け入れており、若年層の栄養不良は決して珍しくありません。まず必要エネルギーやミネラルバランス、NPC/N比などを考慮しながら、PPN、TPNの追加、変更をプランニングし、カンファレンスでの検討結果も踏まえ主治医に提案していきます。患者さんの状態は日々変化していくので、タイムリーに対応していくよう心がけています。個人個人のレベルの底上げと、チームワークの強化が、術後の合併症リスクの軽減や早期回復に繋がると考えていますが、まだまだ職種や経験年数によって温度差があることは否めません。活発な意見交換が行われるよう、カンファレンスや会議での声掛けや雰囲気作りは大切にしています。

## チクバ外科・胃腸科・肛門科病院

## ● 入職してよかったと感じることは？（病院や業務の特徴を踏まえて）

～実務実習生との関わり合いを通じて～ 実習生さんからはスタッフ間のコミュニケーションが活発で明るい雰囲気との評価をいただきます。確かに、多職種で患者さんのケアについて話し合っているという場面には頻りに遭遇します。どの職種のスタッフも実習生に対しては、せっかくの機会だからいろいろな経験してもらいたいという思いが強いようで、医師は実習生からの処方提案にしっかりと向き合ってくれますし、看護師は患者さんの病状を細かく説明してくれます。そういったところが、チーム医療を強く感じてもらえるというチクバ外科の特徴のひとつではないかと思っています。実習生さんとは、その後「薬剤師」として勉強会や学会で再会することがあります。病院薬剤師になり、日々の奮闘ぶりを話してくれるキラキラした姿を見ると、立派に成長するお手伝いが少しはできたのかなと嬉しく思います。

当院で実習をされた薬剤師の皆さんを密かに『チクバ・チルドレン』と呼んでいます。この記事を読まれたチクバ・チルドレンの皆さん、是非またお越しくださいね。

## ● 今後どういった活動を行いたいですか？

地方の小規模病院であっても、質の高い医療を提供していかなくてはなりません。しかし当院は大腸肛門疾患に特化した病院であり、薬剤の知識がどうしても偏る傾向にあります。そのため、学会やセミナーへの参加、他病院との連携などを積極的に行い、得られた知識の共有強化を図りたいと考えています。チクバ外科ならではのチームワークとスピード感を存分に発揮し、今後も患者満足度を高めていきたいと思っています。

## | プラスαを意識した情報提供

## ● 日々の業務について

当院のDI業務は専任ではなく、5人の薬剤師それぞれで分担して行っています。私は、新規採用薬・採用中止薬の案内や、添付文書の改訂情報などを院内スタッフに提供しています。情報提供の方法は、院内LANの閲覧機能を使用して、様々なスタッフに見ていただいています。長い文章だと目を通す前に敬遠されてしまうため、目を通してもらいやすく、さらに理解してもらいやすいように、要点を絞って、端的で分かりやすい文章に加工するよう努めています。

また、DIニュースを年5回発行しています。薬剤師持ち回りで、問い合わせの多い内容や、院内のヒヤリハット事例など、その時々でホットな話題を題材にして作成しています。最近では、「サムスカ®投薬中の注意点」や、「低カリウム血症を引き起こす薬剤」についてまとめたものを発行しました。様々な職種のスタッフが見るため、分かりやすく表にしたり、カラフルで読みたくなるニュースレターを作成するよう心掛けています。作成したDIニュースが、診察室などで実際にスタッフに活用されているのを見るとうれしく思います。

## “ 薬 剤 師 の 顔 ”

## ● DI担当として大切にしていること

DI業務を行っていく上で、大切なことは信頼関係だと思います。病院では、患者さんだけでなく、医師や看護師など様々な職種から薬についての問い合わせがありますが、日ごろから聞きやすい雰囲気、薬のことは薬剤師に聞いてみようという信頼を得ることが、よりよい情報提供につながると思っています。

私は、以前先輩薬剤師から教わった「プラスαの法則」を日ごろから意識しています。単に質問されたことに回答するだけでなく、その回答に至った理由や、もし不相当であるなら代替案なども調べて、プラスαの情報も伝えるようにしています。まだまだ先輩方にくらべたら知識や経験も少ないため、調べることに時間を要したり、先読みして幅広く調べてもその内容は回答には必要なかった、ということもあります。しかし、そういう地道な努力が自分の知識となり、また、相手の信頼を得ることにつながるのではないかと考えています。

## DIの仕事（主な業務内容）

- ・ 医薬品情報の収集・管理・提供
- ・ 添付文書の改訂情報や医薬品安全性情報の提供
- ・ 新規採用薬、採用中止薬の手続き
- ・ 患者・スタッフからの問い合わせ対応
- ・ 適正使用に関する掲示物の作成
- ・ DIニュースの作成
- ・ 副作用事例の収集と報告

this is my  
DI style  
— DI担当の横顔 —



## PROFILE

- ▶ 薬剤師歴13年
- ▶ 岡山県倉敷市出身
- ▶ 就実大学卒
- ▶ 経歴：5年間調剤薬局で勤務したのち、一念発起し病院薬剤師の世界へ飛び込み現在に至る

# プレアボイド

# の可能態

「可能態」とは、アリストテレスによって語られている言葉。可能性を秘めたもの（花に例えれば種子）から発展して現実的な結果としてあらわれたもの（花が咲いた状態）を指し示す概念です。岡山県病院薬剤師会の「プレアボイド推進」の現状や結果、報告について紹介します。

## プレアボイドとは？

「PREvent and AVOID the adverse drug reactions」の略称です。  
 病院薬剤師にとって、薬物療法の安全管理職能がわかる言葉として創られた造語です。  
 「プレアボイド=副作用回避」との印象が強いと思われませんが、より広く捉えて薬剤師が職能を発揮して発見した相互作用、投与禁忌などの未然回避や用量の是正、処方薬の追加提案など薬物療法の向上に寄与した事例もプレアボイドです。平成28年4月より、薬物治療効果の向上に寄与した事例を様式3として収集開始しました。（日病薬ホームページより抜粋）

## プレアボイド報告施設と件数の年次推移（2019年度の集計結果）

施設名	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	前年比	様式1	様式2	様式2	報告者数	総計/報告者数
倉敷中央病院	3166	4152	3310	2641	-669	1	2569	71	47	56.2
岡山大学病院	3386	3835	3329	2618	-711	15	2226	377	47	55.7
岡山赤十字病院		68		286	286	8	239	39	20	14.3
岡山市立市民病院		6	268	244	-24	10	137	97	21	11.6
津山中央病院		61	214	213	-1	12	171	30	24	8.9
石川病院				121	121		121		1	121.0
重井医学研究所附属病院	3	30	30	58	28	5	32	21	10	5.8
川崎医科大学総合医療センター				40	40	1	35	4	13	3.1
水島協同病院			11	36	25	4	30	2	8	4.5
吉永病院	29		6	27	21		27		1	27.0
チクバ外科・胃腸科・肛門科病院	6	21	12	21	9		17	4	5	4.2
川崎医科大学附属病院		9	16	13	-3		12	1	7	1.9
宮本整形外科病院				11	11	1	10		4	2.8
南岡山医療センター		28		3	3		3		1	3.0
岡山旭東病院				2	2	1		1	1	2.0
津山第一病院				2	2		2		1	2.0
しげい病院				1	1		1		1	1.0
玉野市民病院		1	1	1	0		1		1	1.0
岡山医療センター		24		1	1		1		1	1.0
済生会吉備病院	7	1		1	1	1			1	1.0
光生病院	10	5		1	1	1			1	1.0
岡山済生会総合病院	1	3	16		-16					
倉敷成人病センター		42			0					
岡山県精神科医療センター	10	5			0					
総計	6608	8286	7213	6341	-872	60	5634	647	216	29.4

## 2019年度のレビュー

▶ 昨年と比較して、報告件数は7213→6341件（872減少）、報告施設数は11→21施設（10施設増）となっており、報告件数は減少したものの、報告施設数は増加していることから、プレアボイド活動に対する裾野の広がりが感じられる結果となった。

▶ 今年度、新しい報告施設の増加が目立った。中でも石川病院の一人当たりの報告件数は群を抜いていた。岡山大学病院と倉敷中央病院は総件数こそ下がったものの、以前高い報告件数と一人当たりの報告件数を維持している。

## カペシタビンの適切な減量により、手足症候群の改善に寄与した事例

### 患者背景

60歳代、男性  
 主訴：足裏の疼痛による歩行困難、水疱の形成  
 既往歴：直腸癌

### 介入背景

▶ 直腸がん術後補助化学療法にて、カペシタビン4200mg/日が開始となった。

▶ (カペシタビン2クール目day10) 足の裏の痛みと歩みにくさ、水疱形成の訴えがあり受診された。足底部の軽度腫脹、発赤、指尖部の水疱形成によりgrade2の手足症候群と診断され、カペシタビン休薬の指示となった。

▶ 今回、休薬の手持ちの残薬を使用して、減量して再開の指示が出た。

▶ 今回、処方他は他の薬剤のみで、カペシタビンの処方はずなかったが、別の薬剤師が処方監査を行った際に、カルテを確認し、減量再開指示、残薬使用を確認されており、処方せんにコメントが残されていた。

### 介入内容

主治医よりカペシタビンを3600mg/日に減量し再開する指示があり、処方監査時に確認されていた。残薬を使って再開することから、カペシタビンの処方はなく、そのため減量基準の精査までは行われていなかった。

投薬時に、患者の身長と体重から体表面積を再度計算したところ、1.64㎡であり、カペシタビンの適正使用ガイドによると、1段階減量した量は3000mg/日であり、3600mg/日では過量であることが判明した。

主治医にその旨を伝達し、3000mg/日への減量を提案した。採択され、減量となった。患者へは用量・用法を口授した。

▶ 足の裏の痛みや歩みにくさなどの症状の消失、水疱の改善、足底の上皮化がみられ、患者本人、家族からも「楽になり、良かった。」との発言が聞かれ、治療の継続に繋がった。

### ◆ ここがポイント！薬剤師の思考 ◆

単に減量すれば良い訳ではなく、治療効果を落とさず、また患者さんにとって苦痛が少なく治療を継続出来る量への減量を、薬剤師として根拠に基づき提案することが大切だと実感した症例でした。

### “ワタシのプレアボイド”

医師と日々良好なコミュニケーションを取り、どんな些細なことでも尋ねたり、確認出来るような関係を築いて、医師と患者さんとの橋渡しの様な存在になることが出来れば、と感じています。



### PROFILE

- ▶ 薬剤師歴9年目
- ▶ 岡山市出身
- ▶ 就実大学卒
- ▶ 仕事にも遊びにも常に全力！いつも笑顔で、をモットーに、患者さんにとってのアンサンブルシンデレラ(縁の下の力持ち)になれるよう、日々奔走中です。